

さまざまな現場にある保育者の共同省察

— 「保育土曜ゼミ」という場が形成するもの —

佐治由美子

猪本 こそ

「保育土曜ゼミ」の成り立ち

お茶の水女子大学の幼保プロジェクト^{注1}では、二年目にあたる二〇〇七年度からいくつかの自主ゼミが始められた。それは、プロジェクト・メンバーと学部生や院生との間にある、保育をめぐる関心領域を自主ゼミの形でつないでいくための試みであったが、実際に始めてみると、本学の学生だけでなく他大学の学生や、保育現場にある方々、研究者の方々が次々に参加してくださり、継続されていった。ここでは、その自主ゼ

ミの一つである「保育土曜ゼミ」について報告したい。

このゼミは、二〇〇七年秋、私（佐治）が主任を兼務していたお茶の水女子大学附属いずみナーサリーのある保育士から、他の現場の方と一緒に勉強する場をつくってほしいとの願いを受け、スタートしたものである。多様な保育の場にある方々が一同に会して保育を学ぶのにふさわしいテキストとは……。私の頭に真っ先に浮かんだのは、津守真先生の「保育者の地平」^{注2}であった。

身近な保育の場に声をかけ集まってくださったの

は、保育園二園、幼稚園（未就園児クラス担当者を含む）五園、特別支援学校一校の職員の皆さんだった。

常勤・非常勤のバランスを見ていくと、一対二の割合で非常勤の方が圧倒的に多い。これは、非常勤で保育にかかわる方々に、安定的な学びの場が用意されにくいことを物語っているように思われる。

ゼミの進め方は、テキストの一章ずつをいねいに読むこととし、毎回保育体験と重ねた読後感を自由にレポートしていただき、それに沿ってみんなで語り合うという形式をとった。

こうして月一回のペースでゼミを続けていく中で、気づいたことがいくつもある。その一つは、参加者がそれぞれの保育を語るのに、乳児保育や幼児保育、就園前の子育て支援的な保育、さらには特別支援学校の教育まで、さまざまな取り組みがいつべんに組上に上るような話し合いになる。が、いつもその立ち位置の違いについて語り合うような議論にはなっていないのである。参加者のまなざしが、今ここに生きる子ども

もと保育者のその営みを通して、変わらざる示される保育の原理を求めているからであろうか。それは、幼と保の別を超え、また特別支援の枠も超えて、子どもを見つめてこられた津守先生の保育理論の広さと深さが、参加者に浸透しているからであるように思う。

またもう一つは、ゼミの開始時点では読後感を語り合うことだけを考えていたが、日を重ねるうちにお互いの保育を共同で省察する場へと発展してきているように思う。保育の省察は、決まった型が先にあるのではなく、実践者それぞれに取り組みやすい形が模索されていくことこそ重要なかもしれない。

以下に、ゼミの一員である猪本さんの一文を紹介する。猪本さんは、土曜ゼミの中で津守先生の『いまを充実させる』と倉橋惣三先生の『自己充実』の二つの「充実」を並べて考えたことをきっかけに、経験一年目の保育を次のように振り返ってくださった。

佐治由美子

（お茶の水女子大学・幼保プロジェクト専任講師）

「保育士躍ゼミ」をきっかけに

「こわい、こわい」

今日もうんていの上で四つん這いになって立ち往生するK夫が私を呼んでいる。私は慣れたように近づいて「よいしょっ」と抱きかかえてうんていから降ろす。

K夫は「テヘッ」と笑う。こんなことを毎日のように繰り返した。

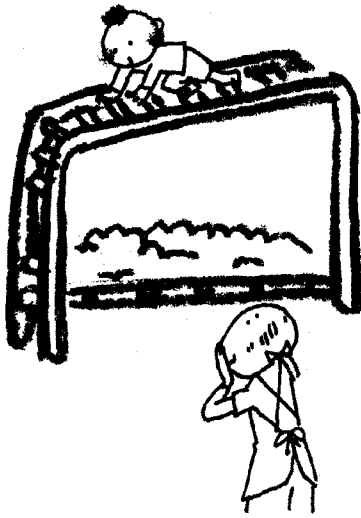
わが幼稚園のうんていは少々曲者なのだ。片方のはしごからは登っていけるものの、地面に平行になっていくうえ、もう一方ははしごになっていないために、器用の上でUターンしなければ地上には戻ってこれないのである。そのため、年少児が使いこなすのは難しく、「うんていは先生と一緒にやろうね」というルールのもと、小さな子どもたちも果敢にチャレンジしていた。そんな中、保育者の目を盗んで不敵な笑みを浮かべながら、こっそりとやるのがK夫だった。抱かれて降りた後の「テヘッ」の理由はここにあった。

K夫は入園当初から、集まりの時間にはみんなの輪から抜けて猛スピードで部屋を飛び出していき、「まっつー」と追いかける保育者との追いかけっこを幾度となく楽しんだ。楽しそうに大笑いしながら逃げるK夫につられるように、ほかの人も走り出した。担任になって一か月も経たない私は、あっちへこっちへと追いかけていきながら「どうしたらいいのやら……」と頭を抱えなくなるような日々だった。

そんなK夫も、「こわい」と言って身動きがとれなくなるうんていの上から降りる時にはスツと抱かれてくれた。それがうれしくもあった。

一学期も終わりに近づいた七月のある日、砂場で団子を作っていると、うんていでいつものごとく立ち往生するK夫の姿が目に入った。「こわい、こわい」と言っている。それはわかったものの、私の横には今日初めて友達と一緒に砂場で手を汚してお団子を作っているA子がいた。私がここを離れたら、きつとA子もついてきてしまうだろう。K夫には少し待ってもらお

う！ 中腰になった体だけは和やかなお団子屋さんの場にありながら、私の気持ちの全ては危機的状況のK夫に注がれていた。その時、年中組の担任U先生がK夫の様子に気づき、近づいていってくれたのが見えだ。『よかった。U先生がK夫を抱いて降ろしてくれるんだ』そう思って、私はほっとした。そして、ようやく団子を作るA子たちに気持ちを戻した。そして、またふと、うんていの方を見ると、まだうんていの上にいるK夫と、その傍らでK夫を見守るU先生がいた。



どうやら「頑張つてごらん！」と声をかけてくれている様子。そして、K夫も真剣な顔つきで、恐る恐る手と足を前に進めている。ようやく端まで到達したところで、U先生がK夫をスッと抱きかかえ、下に降ろした。地に足がついたとたん、スキップともジャンプとも駆け足ともいえないような足取りで、私の所までやってきたK夫は、「できたよ！ やったー！ ああ やって、上からずーっとやったんだよ！」と報告してくれた。

『そうだったのか』私はこんなにも喜びに満ちたK夫を前にして、どこか晴れない気持ちになった。「こわい、こわい」というK夫を抱いて降ろすことを何度となく繰り返す中で、一度も「もう少しだよ！ 頑張つてごらん」と声をかけたことはなかった。『きつと、私の横にA子がいなければ、今日も私はK夫を抱いて降ろしていただろう。それなら、これほど自信に満ちて体を弾ませるK夫の姿はなかったんだ』そう思うと、K夫への申し訳なさや、自分の力不足を痛感して

の恥ずかしさ、でも今、目の前で喜びに満ちているK夫がいるという事実への安堵感、いろいろな気持ちが入り混じったような感情が一気に押し寄せてきた。

この度、倉橋惣三先生の『幼稚園真諦^註』の中に出てくる子どもの「自己充実」そして、「相手の内部に即して」行われる保育者による「充実指導」について考える機会があった。そこで一番に思い浮かんだのが、うんていにまつわるK夫とのこの場面であった。あの時、私はK夫の「今」の充実を大切にしていただろうか。「こわい」と言うK夫を抱いて降ろすという「K夫への手の貸し方」を安易に作り上げていなかっただろうか。普段のK夫とのつかめそうでつかめない関係性を、抱いて降ろすということではつかめたような気になつて満足していなかっただろうか。抱いて降ろしていたことが恥ずかしかったのでも、申し訳なかったのでもない。私がK夫の「今」の充実を助けることを考えることなく、断片的なかかわりをしていたこと、新

たな一步を踏み出そうとする気持ちが込められた「こわい」を受け止められなかったことが申し訳なくて恥ずかしかったのだ。そのことに気がついた。

子どもの自己充実をどのように支えていくか。助けていくか。それに正解はないだろう。なぜなら、それは目の前にいる子どもと保育者との相互のやりとりの中で常に揺れ動きながら生まれていくものだからである。

しかし、どうしても、揺れ動く中で見えてくるだろう次の一步が待てず、焦りを前面に出した一方的なかわりになつてしまうことがある。それは、目の前の子どもとの「今」にどっぷりと自分を費やす勇気もてないからである。K夫ともかかわりの時もそうだったように、K夫の「今」に寄り添うことでほかの子ども「今」を逃がしてしまうような気持ちになるからである。そのような時、結局はどの子どもとの「今」のやりとりも楽しめておらず、また、それぞれの子どもが

向かおうとしている先も明確に見えてこないのである。そして、そんな時に流れるのは「保育者と子ども」

「保育する者とされる者」という、立場の異なる二者関係が浮き彫りになったような味気ない時間である。

子どもにとっては当然、居心地のよい時間とは言えないだろう。しかし、そんな保育者を前にしても子どもは文句を言うこともなく、その保育は成り立っているかのように思えてしまう。そして、保育を振り返りながらようやく、そのずれに気づかされるのである。

保育者が一人ひとりの子どもとの「今」を充実させるために心も体も没頭するかかわりを繰り返す時、その先で子どもが自己充実を成し遂げ、喜び、目を輝かせ、体を弾ませる姿を見ることができればなら、その保育者にとつてはこの上ない喜びが生まれることになるだろう。それは、保育者が相手に即して内部に入り込み、共に試行錯誤した体験がその喜びの源になっているからではないだろうか。このように、保育者自身が

子どもとの「今」を楽しみ、充実した時間を過ごす時、その姿は大人特有の強い力を示すことにはならないだろう。大人が子どもの気持ちになつて子どもの内側の世界に入つていくならば、むしろ誰の目にも目立たないかわりになるように思われる。

子どもと私（保育者）との充実した「今」を積み重ねていくその先に、自然と生まれてくるのが子どもとの「今」の充実なのだろう。その充実の「今」が必ずやってくることを信じて、子どもとの「今」を大切にできる保育者でありたい。そう願う気持ちは胸にありつつ、その難しさとの闘いは、まだまだ、まだまだ、続きそうな気がしている。

（鎌倉女子大学幼稚園教諭）

猪本こを

注

- 1 ○五歳の発達を見通した保育者養成カリキュラムの創造をめざす「幼・保・大」連携研究プロジェクトをさす
- 2 津守真著「保育者の地平」ミネルヴァ書房 一九九七年
- 3 倉橋惣三著「幼稚園真諦」フレールベル館 二〇〇八年